

## 平田篤胤の太宰春台批判

中 川 和 明

### はじめに

徂徠学派太宰春台が『弁道書』を刊行したのは享和二〇(一七三三)年である。徂徠学派の立場から日本に「道」がなかったこと、儒学でなければ国は治まらないことなどを主張するものである。賀茂真淵の『国意考』(明和二(一七六五)年)、本居宣長の『直毘靈』(明和八(一七七二)年)、平田篤胤の『呵妄書』(享和三(一八〇六)年)などにそれに対する反論が見られるように、『弁道書』は近世の思想界を大きく揺り動かすことになったのである。篤胤は一九世紀初頭に鈴屋門の国学者として近世の思想界に登場するが、著述活動は春台批判によって開始している。篤胤国学 of 思想構造を考察する上で、春台批判は見逃すことのできないように思われるのである。

それでは、戦後の平田篤胤研究において、篤胤の太宰春台批判についてはどのように論じられてきたのであろうか。村岡典嗣<sup>1)</sup>・田原嗣郎<sup>2)</sup>氏・三木正太郎<sup>3)</sup>氏・子安宣邦<sup>4)</sup>氏の篤胤研究書をみると、篤胤の『呵妄書』は宣長国学の祖述であると説明しており、それ以上多くは論じていない。また、篤胤の春台批判に関する個別論文では、小笠原春夫<sup>5)</sup>氏の『「呵妄書」について』があるが、やはり宣長の祖述とするのみである。

こうした先行研究を子細に検討してみると、次のような問題点があるように思われる。第一に、篤胤の『呵妄書』の大枠は確かに宣長国学を祖述したものと考えられる。しかし、篤胤に特徴的な論理も見られるのではないだろうか。先行研究では篤胤の太宰春台批判の特徴が明らかになっていないのである。第二に、篤胤は『呵妄書』以後にも太宰春台批判を行っている。篤胤の春台批判の全体像を考える上で、『呵妄書』以後についても検討する必要があるように思われる。先行研究ではこの点の考察が欠けているのである。以上の二点を踏まえて、篤胤の太宰春台批判について再考しなければならないだろう。

そこで、本稿では篤胤の春台批判を具体的に検討していくことによつて、篤胤国学 of 思想構造の一端について考えてみたいと思う。<sup>6)</sup>

### 一 篤胤初期の春台批判

#### (1) 鈴屋入門以前の平田篤胤

篤胤の太宰春台批判を考察する前に、行論の都合上、篤胤個人の思想形成について触れておかなければならない。安永五(一七七六)年に久保田藩(秋田藩)に生まれたが、実家の大和田家は代々蘭齋学派の学問と深い関係にあった。曾祖父玄胤・祖父依胤・従祖父保胤は蘭齋学派の漢学を学び、父祚胤・兄弟・篤胤自身も蘭齋学派中山菁莪に漢学を習つ

ている。<sup>(7)</sup> 学統では山崎闇斎→浅見綱斎→若林強斎→小野鶴山→中山菁莪となつていのように、浅見綱斎の学問の流れに位置している。<sup>(8)</sup> 浅見綱斎は孔子の『春秋』に依拠して自国を他国に優先すべきことを主張しているが、篤胤は中山によつて闇斎学派のこうした尊内卑外論を教えられていた可能性があるだろう。篤胤におけるナシヨナリズムの淵源は、この闇斎学派にあるように思われるのである。

また、寛政七(一七九五)年に脱藩して江戸に向かった。平田家の養子になるまで約五年間、江戸で遊学しているのである。篤胤自筆履歴書項目<sup>(9)</sup>によれば、寛政七年の項目に「ハナワ入門」とあり、塙保己一に入門したことがわかるが、詳細については明らかではない。また、『大壑君御一代畧記』・『靈能真柱』<sup>(11)</sup>によれば、篤胤は性理学(朱子学)、古学の順に学問を進めるとともに、「良師」を求めて遍歴したという。江戸遊学の際に、徂徠や春台の著書を読んでいたものと考えられるのである。

次に、鈴屋入門以前に篤胤は孔子をどのようにみていたのであろうか。篤胤の回想によれば、論語について「弱年なりし程は、人なみに孔子を、わが夫子とも、稱し、今はも恥を語るに似たれど、論語を宇宙第一の書」<sup>(12)</sup>と考へていたという。「論語を宇宙第一の書」とあるように、仁斎学派と同様に孔子に深く傾倒していたのである。殊に、論語の中で①「篤ク信ジテ学ヲ好ミ、死ヲ守リテ道ヲ善クス」(泰伯篇)②「視ルニハ明ヲ思ヒ、聴クニハ聰ヲ思ヒ」(季氏篇)、③「過チテハ則チ改ムルニ憚ルコト勿レ」(学而篇、子罕篇)、④「其ノ過ヲ見テ、内ニ自ラ訴ムル者ヲ見ザルナリ」(公治長篇)、⑤「仁ニ当テハ、師ニモ讓ラズ」(衛靈公篇)、⑥「子、四ヲ絶ツ、意母ク、必母ク、固母ク、我母シ」(述而篇)などの箇所を「師父」に強く教えられたとしている。以上のように鈴屋入門以前に孔子に深く傾倒していた

のであった。この点に留意しながら、篤胤の太宰春台批判を考察していくことにしよう。

## (2) 『呵妄書』の本論

篤胤は鈴屋入門の直後に最初の著書『呵妄書』(享和三(一八〇三)年)を著している。『大壑君御一代畧記』に「今年太宰純ガ著書ヲ見テ、大ニ其不經ヲ憤リ。呵妄書ト云ヲ著シ玉フ」(新平全第六卷六〇二頁)と記されているように、太宰春台の説に大いに刺激された結果である。『呵妄書』は本論と補論からなっていると考えられるのであり、両者を別々に検討していく必要があるように思われる。

さて、『呵妄書』の本論は『弁道書』からの引用文を「主文」として二九条かけ、それぞれに反論しながら注解していく形式をとっている。主文の一条から一二条までは春台による神道批判の部分であり、一二条から二九条までは徂徠学派による儒学の「道」の説明となっている。これらに対して、篤胤は宣長説によつて逐一反論するのである。そして、『呵妄書』の本論を次のようにむすんでいる。

漢土の古代は治つたと云も覺束なく、況て其後の事は上に段々に云やう如くなるものを、今何國に用ひたりとも何の益か有らう。強て歡ひ好むときはたゞ國家の亂れる端にて、譬へば病なき人のみだりに吐下攻撃の薬を服するが如く、更に益なきのみにあらず終には廢人となることあり。よくよく心すべき事てござる。(新平全第十卷一七九頁)

要するに中国は治まったことはないとして、儒者の説く「道」の無効をいっているのである。このように『呵妄書』の本論はおおよそ宣長説の相述に終始しているといつてよいであろう。『呵妄書』の本論については先行研究によつてしばしば論じられてきたため、ここでは簡単に触れるの

みにしたい。

### (3) 『呵妄書』の補論

篤胤は『弁道書』を批判した後に、七行の空白をおいて補論というべき部分を付している。本論が完成した後に追加された部分と考えてよいであろう。『呵妄書』補論では太宰春台の著書『和読要領』『親族正名』『聖学問答』を批判するとともに、春台の学問全体の批判も述べているのだ。次に、補論部分から春台学全体に対する批判の箇所を抜き出してみたいと思う。

①「元祿寛保の間は未學問の道大いにひらげざる時代なる故に、純なども物識の頭数には入りたりとも、當時や學問の道大いにひらけたる其眼をもて渠らがとへたる古學とかいふ説どもを見るにいと片腹いたき杜撰のみ多くいかしきものでござる。」(新平全第十卷一八〇頁)

②「彼宋儒流の輩といへとも大概は純がごとき偽儒にてはなく、春秋の意を守りて我が國を尊み山崎闇齋淺見綱齋などの云た説には、いとも勇ましく猛く雄々しき皇國魂の言も多いでござる。」(新平全第十卷一八〇頁)

③「かゝる穢汚こゝろの有りながら、己道を得たり氣に一向に孔子を信じ候孔子も我に印可して下されなど申たは、餘りに押の強ひ事でござる。」(新平全第十卷一八二頁)

まず、①では一八世紀前半は学問全体がまだ不完全なものであったために、春台が目立っていたにすぎないとする。また、「古学」については一般的な批判をしているにすぎない。徂徠学派の「古学」に対する批判は後の『入学問答』で比較的多く述べているが、ここでは簡単な記述のみとなっている。次に、②は春台の中国崇拜が孔子の『春秋』の意に

背いているとしている。闇齋学派が『春秋』の意を守っているのは大違いであるとする。宣長の場合、『くず花』などで孔子の尊内卑外の発言にごく簡単に触れているに過ぎないが、篤胤は孔子の『春秋』を徂徠学派批判に最大限に利用するのである。宣長と比較した場合、篤胤の太宰春台批判の特徴はここにあるということが出来る。③は春台の発言、孔子が太宰春台を印下するはずであると豪語したことを批判しているのである。

以上、『呵妄書』の本論と補論を見てきたが、本論より補論の方に篤胤の太宰春台批判の特徴がよく出ているのである。

なお、篤胤は『呵妄書』成稿の二年後に『新鬼神論』をあらわしたが、この中では春台の『経済録』に肯定的に言及しているのである。このように両儀的な対応を行っていることに注意しておきたい。

## 二 「大意」段階の春台批判

### (1) 『古道大意』の孔子観

篤胤は文化八(一八一)年に大意物とよばれる講釈本を作成している。『古道大意』『俗神道大意』『西籍概論』『出定笑語』『歌道大意』『医道大意』『玉たすき』『講本気吹颯』の諸本である。「大意」段階というのは、『靈能真柱』によって篤胤国学が固まる直前の段階である。

さて、これらのうち『古道大意』には、この段階での篤胤の思想の方向がよく示されている。国学の説く「道」について、「眞ノ道ト云モノハ、事實ノ上ニ具ツテ有ルモノデゴザル。然ルヲトカク世ノ學者ナドハ、盡ク教訓ト云事ヲ、記シタル書物デナクテハ、道ハ得ラレヌ如ク思テ居ルガ多イデ、コリヤ甚ノ心得チガヒナコト」(『古道大意』新平全第八卷一一頁)と述べている。儒者は教訓の書物を重視するが、それは正しくないというのである。

篤胤は「教ノ書」に対する「事実ノ書」の優位を説くが、その根拠として孔子の『春秋』を引き合いに出しているのだ。すなわち、

孔子ノ思フニハ、人ヲ教フルニ、夫ハサウスル物デハナイ、是ハカウスルモノジヤト云ヤウニ、尤ラシキ教ヘ言ヲ記シテ、人ヲ誨サウト思フケレトモ、夫デハ人ノ心ニ入カネルカラ、夫ヨリハ是ハ、人ノ行ヒノ事實ニ書著シテ見セルホド、深ク切ニ、著ルルク明カニ、人ノ心ニシミルコトハ無イト云ノ意デゴザル。此意ユエニ、孔子ハ教ノ書トテハ、一部一冊モ作ラズニタゞ春秋ト云記録ヲシラベ正シテ、何ノ某ハ、カ、ル悪キ行ヒガ有タ、誰々ハカヤウノ善事ガ有タト云コトヲ、アリノ儘ニ記シテ、ソノ記録ヲ讀メバ、自カラ其中ニ、チャント悪ヲコラシ、善ヲ勸ムコトヲ、人ノ氣ノ付クヤウニ書取タモノデ、實ニ孔子生涯ノ骨折ト云ハ、此春秋デゴザル。(新平全第八卷二三頁)

と説明している。「尤ラシキ教ヘ言」では人の心に届かないが、「人ノ行ヒノ事實」は届くという。孔子が「教ノ書」よりも「事実ノ書」の方を重視して、真意をすべて『春秋』の中に込めたとする。中国の春秋学の発想がここで語られているのである。

さらに、篤胤は重ねて孔子の『春秋』について次のように述べている。夫ユエニ、ワガ志春秋ニ有リトモ、又我ヲ知ル者ハ、ソレ惟春秋カ、我ヲ罪スル者ハ、其タゞ春秋乎、トモ申タデゴザル。此意ハ、我存分ニ志ヲコメテ、記シタル物ハ春秋ジヤ、此春秋ガ世ニ傳ハリ、後ノ人ガ是ヲ見テ、イカニモ孔子ハ、道ヲ辨ヘタル人ト知レルモノハ春秋ジヤ。又國々ノ君ニシロ、主弒シハ主コロシ、親コロシハ、親弒シト、有ノマ、ニ、記シタル故ニ、是ハ孔子ノ憚リナキノジヤト、後ノ世ニ我ヲ罪ニ言ヒ貶スモノモ、此春秋ジヤト云ノ意デゴザル。是程ニ心ヲコメテ書タル春秋ユエ、イツチ實ノ有モノデ、

孔子ノ心ノヨク見エルハ、此書ニ越タル物ハナイ。(新平全第八卷二二―二三頁)

『孟子』勝文公章句下の「孔子曰く、我を知る者は、其れ春秋か。我を罪する者も、其れ春秋か」<sup>15)</sup>を根拠にして、孔子の真意はすべてこの『春秋』の中に現れていることを力説しているのである。『孟子』の権威を大いに利用しているわけである。

篤胤は『古道大意』の中で『春秋』についてこのように説明した後に、日本の儒者一般を批判する。すなわち、

然ルニ大カタ世間ノ儒者ナドガ、儒書ノ上デモ斯ノ如ク、慥ナル訣ノアルモ知ラズ、只々ヒネクツタ理屈ノ、教訓ヲ書テキルハ、己ガ本尊トスル、孔子ノ本意ヲ會得セズ、春秋ヲ孰ク讀ヌカラノ誤リデゴザル。ナント是デ眞ノ道ト云フモノハ、教訓ノ書デハ其ウマミガ知レズ、事實ノ書物デナクテハ、眞意ハ得ラレヌ訣ジヤト云フコトモ、合點ノユキサウナ物デゴザル。(新平全第八卷二三頁)

と述べている。要するに世間の儒者が『春秋』をよく読んでおらず、その重要性を理解していないとするのだ。そして、「教訓ノ書」に対する「事実ノ書物」の優位を説くのである。なお、『古道大意』では日本の儒者一般の批判をしているのであって、徂徠学派を名指して批判しているわけではない。

## (2) 『西籍概論』の春台批判

篤胤は講本『西籍概論』の中で中国および日本の儒学の概略を批判的な立場から説明している。書き出しに「サテ今日ヨリ三日ガ間ニ申ス所ハ、記シオキマスル通り、儒道ノ大意デゴザルガ」(新平全第十卷一七頁)と記しているように三日間の講釈の記録である。上巻、中巻、下巻の三巻からなり、下巻の後半は日本の儒学諸派の批判となっている。

例えば、「御國ノ儒者ニ、大カタハ此孔子ノ本意ヲヨク得タリト思ハル、ハナク、別シテ近世ニ古學トイフ學風ヲ、トナヘ出タル儒者ドモガ、殊ニサウデゴザル。」(新平全第十卷六四頁)と批判する。儒者は大方「孔子ノ本意」に反しているが、特に古学派に問題が多いとしている。篤胤による儒学批判の中心が古学派批判であつたことがよくわかるであろう。さらに、篤胤は『西籍慨論』の中で太宰春台について次のように述べているのである。

①「宋儒ノ學ヲ唱フル儒者ヲバ、聖人ノ旨ニ違ツタト云ヒ、口ヲ極テ呵ツタナレドモ、其流ノ輩モ、大概ハ純ガ如キ僞儒ニテハナク、春秋ノ意ヲ守リテ、我國ヲ尊ミ、山崎闇齋、淺見綱齋ナドノ云々説ニハ、甚モ勇マシク、猛ク雄々シキ皇國魂ノ言モ多デゴザル。」(新平全第十卷一三四頁)

②「カ、ル汚穢コ、口有ナガラ、己道ヲ得タリ氣ニ、一向ニ孔子ヲ信ジ候、孔子モ我ニ印可シテ下サルナド申タハ、餘リニ押ノ強イコトデゴザル。純ガ如キモノニ、印可スルヤウナ孔子ナラバ、更ニ好人トハ云ハレマイ。」(新平全第十卷一三五頁)

この①②は共に『呵妄書』補論の記述と内容・表現ともにほぼ同一である。『呵妄書』補論をそのまま利用しているのだ。同年の仏教批判の講本『出定笑話』にも太宰春台批判がみられるが、その内容は『呵妄書』補論を繰り返したものととなっているのである。

### (3) 『講本気吹颺』の徂徠学派批判

篤胤は『講本気吹颺』において儒学・仏教・蘭学などを批判するとともに、国学の概要と諸学問に対する優位を説いている。殊に、儒学批判の根柢について整理した形で述べていることに注目したい。国書と漢籍の優先順位、闇齋学派の尊内卑外論、徂徠学派批判の順で説明している

のだ。徂徠学派批判の部分だけを取り出したのでは篤胤の意図が明確にならないので、以下順にこれらを見ていくことにしたい。

#### ア、国書と漢籍の優先順位

宣長の『玉勝間』の中に「儒者の皇國の事をばしらずとてある事」という一文がある。世の儒学者が日本のことに無知であることを批判するものである。宣長はそこで孔子に触れているわけではないが、儒者の学問の偏りを問題にしているのだ。篤胤もこうした説を独自の立場から継承して、国書と漢籍の優先順位を大きく問題にしている。すなわち、

①「今の世の儒生輩の學風も。大かたは孔子の意に背くことのみで。實に歎息の至りで御座る。其は本とし學ぶべき皇國の學びをせず。漢籍のみを學で居るが。學問は何の爲にすること、心得たるか。都て學問の道は。譬へ外國のことを學ぶにも致せ。その學ぶ主意は。其の善事を取て。此の御國の御用にせんとて。學ぶことぢやに依て。まづ御國のことを本とし學んで。さて外國の學びに及ぶが順道で御座る。」(新平全第十五卷一一六頁)

と述べている。儒学者はそもそも孔子の意に背いているとした上で、国書を優先すべきことを説くのである。学問の目的について「御國の御用」のためとする。国書を中心に学び、その後外国の書籍も学ぶべきであるというのである。それが「順道」であるというのだ。国書優先の根柢が簡潔に記されているのである。宣長が孔子に言及せずに国書優先を説いていたのに対して、篤胤は孔子を引きながら説いていることに注意しなければならない。ここに篤胤の説の特徴が出てきているのである。

さらに、篤胤は国書と漢籍について補足的な説明をしている。すなわち、

②「然るを。俗の漢學者流を見通すに。我が國の事を問れても。知らずと云て恥と思はず。戎國のことを問へば。知らぬことまで。知た

貌に申す御座る。彼卑き口ずさびにも。『虎のなく聲をきかれて  
儒者こまり』。また。『魯國の僉議せんぎする間に腰かゝみ。』とも申した  
は。儒者の此癖を詰とつたもので御座る。』（新平全第十五卷一一六頁）

③「拙者が心には。物學びすると云ひつゝ。己が國風の書を。讀めぬ  
など申すは。此上もなき恥辱と思ふが。彼の輩「儒者―筆者註」は。  
恥を知らねば。恥とも思はぬ赴なれども。是れ孔子の意にあらず。

孔子もし。皇國の人に生れたならば。俗の儒生輩がする如く。此の  
御國の學びを心とせず。魯の國齊の國の穿鑿せんさくする間に。腰のかゝむ  
やうな。迂遠なることにのみ。生涯を送りませうや。時務に預る。

此御國の學を本として。外國の事は。羽翼に學び申すべきは。云ま  
でも無い事と思はれます。』（新平全第十五卷一一七頁）

と述べている。②では日本のことを知らない世の儒者を批判している。  
中国のことばかり研究していて、日本のことを知らないというのである。

③では国書を読めない儒者を批判しているのだ。もし、孔子が日本に生  
まれたならば、国書を中心に学んだはずであると説くのである。「此御  
國の學を本として。外國の事は。羽翼に學び申すべきは。云までも無い  
事と思はれます」ということを強調するのである。以上①②③のよう  
に、篤胤は漢籍に対する国書の優先を主張しているが、儒学側はこれら  
に対して直接には反論していないように思われる。

#### イ、閻齋学派の尊内卑外論

篤胤が『呵妄書』や『西籍慨論』において閻齋学派に言及しているこ  
とはすでに述べた。『講本気吹魅』では閻齋学派浅見綱齋の『靖獻遺言  
講義』の「中國辨」「處士劉因」を組み合わせながら大幅に引用してい  
るのだ。すなわち、

①「中國夷狄の名。儒書にあり來ること久し。夫れ故我が國に在て。  
儒書盛に行はれ。夫を讀ほどの儒者どもが。唐の書物に。日本をも

夷狄と云ひ置たるを見て。とほけた學者が。あら口をしや恥かしや。  
我れは夷狄に生れたげなとて。我れと作り病をして嘆くが。扱も浅  
ましき見識ぞ。我が生れた國ほど。大事の中國が何處に有うぞ。國  
が小くと。何が違はうぞ。同じ日月を。唐人の差圖を受もせず。  
載て居る國に。唐人が。夷狄と書て置た程にとて。もはや兀はぬやう  
に覺えて居るは。人に唾を懸られて。得拭はずに。泣て居ると同じ  
ことぞ。』（新平全第十五卷一一八頁）

②「道を學ぶ者は。實理當然を學ぶなり。我國にて。春秋の道を知れ  
ば。我國が即ち主なり。他國をば客と見る。是れ即ち孔子の旨なり。  
夫を知らずに。唐の書を読むから。唐鼻負に成て。とかく唐から眺  
める。日本のなりにうづり覺えて。とかく夷狄々々と。あちへつら  
れる合點ばかりするは。全く孔子春秋の旨と。うらはらなり。孔子  
も日本に生れなば。日本なりに。春秋の旨は立つはずなり。是則。  
よく春秋を學び得たると云ふものなり。今春秋を讀て。日本を夷狄  
と云は。春秋の。儒者をそこなふには非ずして。能く春秋をよまぬ  
者の。春秋をそこなふ也。』（新平全第十五卷一一九頁）

とある。①は「中國辨」と「處士劉因」を組み合わせたものである。日  
本を「夷狄」とする儒者を批判している。中国側の見方をそのまま受け  
入れる必要はないというのだ。②は「中國辨」からの引用である。孔子  
の「春秋」の意に従うのであれば、自國を主にして他國を従にすべきで  
あるとしている。「今春秋を讀て。日本を夷狄と云は。春秋の。儒者を  
そこなふには非ずして。能く春秋をよまぬ者の。春秋をそこなふ也」が  
浅見の主張の根幹である。以上のように篤胤は浅見のこの著書を高く評  
価しているのであった。閻齋学派には多様性があるが、浅見を特に重視  
するのである。

## ウ、徂徠・春台の批判

篤胤は闇齋学派の尊内卑外論を宣揚した後、徂徠学派を批判しているのである。すなわち、

①「山崎先生かつて物語りに。唐より日本を従へんとせば軍ならば。

堯舜文武が大將にて來るとも。石火矢にて。打崩すが大義なり。禮儀徳化を以て従へんとすると。臣下とならぬが。是れ春秋の道なり。我が天下の道なり。と云はれたり。」(新平全第十五卷一一九頁)

②「徂徠や太宰は。まさにかうは有うか。云はうか。既に徂徠などは。

太宰が師匠ぢやが。孔子の肖像へ賛をして。日本國夷人。物茂卿。拜手稽首敬題。と書きましたが。なんと之が。孔子の心になんか。あ、あ、孔子は。さこそく泉下に於て。眉をひそめ。貌をそむけて居る事で有ませう。」(新平全第十五卷一一九頁)

と記している。①は山崎闇齋の有名なエピソードである。闇齋学派の姿勢を端的にあらわすものとされている箇所である。細部の記述については史料によって異同がみられるが、闇齋の發言の大筋はこの通りであろう。また、②では「徂徠や太宰」とあるように両者を併記して批判している。徂徠が「日本國夷人。物茂卿。」と署名したことを問題にしている。徂徠の極端な中国崇拜と卑屈な姿勢は孔子の『春秋』に反するといえるのである。このように篤胤にあっては、闇齋学派の尊内卑外論を宣揚することと、徂徠学派の中国崇拜の批判は不可分の関係にあったのだ。

### 三 篤胤国学確立段階の春台批判

#### (1) 『入学問答』の孔子観

篤胤は文化十(一八一三)年に『靈能真柱』を刊行した。幽冥論を体系的に論じ宣長国学の範囲を出て、篤胤国学を確立させた著書である。同年に『入学問答』(文化十(一八一三)年正月奥書、刊行年不詳)を

旅先で執筆している。五つの問答によって国学の概要を紹介するものであり、簡潔な入門書となっている。したがって、この問答集によって、篤胤国学確立段階の春台批判をみる事ができるのである。

さて、篤胤は『入学問答』の中で孔子の『春秋』についてどのように説明しているのだろうか。すなわち、

孔子はこの心に候ゆゑ。教訓の事とは。一部一冊も作らず。たゞ春秋をのみしらべ正して。此記録をよむときは。自づからに悪を懲し。善に勸み候やうに。書取候事にて。孔子生涯の骨折と云は。この春秋に候なり。其ゆゑ。我が志春秋に有とも。また我を知る者は。それ惟春秋か。我を罪する者は。其たゞ春秋乎。とも申候也。斯やうに心をこめて撰み候書ゆゑ。漢籍にては。春秋ほど實の有る書は無く。孔子の心よく見え候は。此書に越候もの無御座候。(新平全第十五卷九六頁)

と述べている。『古道大意』における『春秋』の説明を要約したものとされているのである。強調したい箇所を何度も繰り返すのは篤胤の著書の方法でもある。

さらに、篤胤はこうした孔子観によって世間の儒学者を批判するが、その箇所を引用してみよう。

①「然るを世の儒者など。儒書の上にも。此の如く。著明なる意味のこれある事を辨へず。只々教訓を記し候漢籍に據らでは。道は知れぬ事と。狭く心得候は。吾が本尊と致し候。孔子の本意を會得せず。春秋をよく讀まぬ誤にて候なり。春秋を熟讀いたし。孔子の意をよく得候へば。此方の學風に不審を起し候事。一ツも御座なく候なり。」(新平全第十五卷九六、九七頁)

②「世の儒生輩が如く。漢土を本とし。御國を末と致し候は。道の罪人にて。儒道を以て申候ても。春秋の。尊内卑外の旨と相反し。

いはゆる左道の學者に候なり。」(新平全第十五卷一〇二頁)

この①では世の儒者が『春秋』をよく読んでいないという。『春秋』を読めば篤胤国学の「学風」に納得するはずだというのである。②では『春秋』の「尊内卑外の旨」に反しているとして日本の儒者を批判しているのである。「左道の學者」とまでいつている。①②共に、世の儒者のこととしているが、徂徠学派を念頭においていることは明らかであろう。

## (2) 『入学問答』の徂徠・春台批判

篤胤は『入学問答』の中で春台をはじめ古学派全体に対する批判を展開している。すなわち、

さて我が古學「この場合は国学の意味―筆者註」の本は。畏くも東照宮の御神意に依て。光國卿の御開きなされ候へば。いかで其より後に起り候。古文辞家の儒者の。謂ゆる古學に倣ひ候名稱と申すべきや。強て申候は。儒者の古學と申候が。此方の古學の起り候を見て。相眞似事ならむも知べからず候。(新平全第十五卷九九頁)

と述べている。国学は家康の意志によって生じたものであって、儒学の古学派より早いというのである。また、国学側が自らを「古学」と称していたことの重要性に注目したい。徂徠学派との間で「古学」という学風の名称を巡って争っていたのであった。

さらに、篤胤は徂徠と春台に対して次のように述べている。

①「御國に於て。古學と申候に二派これ有り。一は伊藤仁齋に起り。

其子東涯これを繼て。ますく委く。一は荻生徂徠に起り候て。門人太宰純が輩。これを繼て説ひろめ候。此二派を並べ考へ候に。徂徠が學は。古學とは稱へ候へども。多く漢儒の説に依りて。建立い

たし候ゆゑ。實は古學とは申がたく候。其文章も。古文辭などと申候へども。韓柳を祖といたし候へば。眞の古文とは申し難く。殊にわざと。黜屈なる語を拾綴りて。人をおどし候など。實は見解もいと卑き事に候。」(新平全第十五卷一〇五頁)

②「太宰純が書どもは。大抵一部一冊として。有用の物なく。と思召さるべく。實は此者の云ひおき候言どもは。志ある者の。風上にて讀上げ候も。穢らはしき事に候なり。荻生太宰等が學は。決して孔子の本意に叶はず。世に漢國を稱め尊み。御國を卑め譏り候儒者ども。多くなり候は。全く此者どもの學の。起り候より初まり候事に候。」(新平全第十五卷一〇六頁)

まず、①では徂徠学派の「古学」について「漢儒の説」に依拠したものであり、古学ではないとする。古文辭といつても「眞の古文」ではないと述べている。②では春台の著書について「大抵一部一冊として。有用の物なく。」と全面否定している。前に触れたように『新鬼神論』では春台の『經濟録』を高く評価していたのであるが、ここでは全面否定するのみである。さらに、「世に漢國を稱め尊み。御國を卑め譏り候儒者ども」が多くなつたのは、徂徠・春台の学問の影響であると断ずるのである。徂徠・春台批判がここに明確に記されているのだ。

## 四 『氣吹舎筆叢』の春台批判

### (1) 「太宰純の嘉言」

篤胤は天保十四(一八四三)年に秋田で死去したが、没後に篤胤の遺稿の一部によって『氣吹舎筆叢』(成立年次不詳、明治十七年(一八八四)刊)が出版された。宣長の『玉勝間』を模したものと考えてよいであろう。藏書家・博識家のこと、徂徠学派のこと、真淵・宣長のことなどが主な内容となっている。この中に、「孝経」「古文孝経の序」「物部



徂徠の学問」「太宰純の嘉言」など徂徠学派に関する記述が比較的多いことに注目したい。執筆年次が明らかではないが、篤胤の徂徠学派批判を検討する上で、欠かせないものとなっているように思われる。

それでは「気吹舎筆叢」の中で、篤胤は太宰春台について具体的にはどのような述べているのであろうか。「気吹舎筆叢」所収「太宰純の嘉言」の書き出し部分には、

俗には太宰純を。徂徠にならべて云ふ事なれども。非言なり。純はその見識。徂徠にはこよなう劣りて。心ざまあぢきなく今の俗の儒者どもの。皇國を誹る首唱にて更になつかしからぬ男なり。然れども諺に澁柿も甘ぼしとなるといふ如く。さはいへ漢學には大じく功ありて。其が中には。誰も心得をりてよき事もまゝ云へりけり。

(新平全第十五卷四四九頁)

とある。批判と称賛が混在しているのである。大変屈折した表現を用いて説明しているが、「漢學には大じく功あり」「誰も心得をりてよき事」として春台を高く評価していることがわかる。「入学問答」における春台学の全面否定とは大きく異なることに注目しておきたい。「入学問答」では「大抵一部一冊として。有用の物なく」として春台の著書を酷評していたが、ここでは逆に高い評価を与えているのである。春台に対して賛否両論を述べていることに注意しなければならぬだろう。片言隻語をとらえたのでは篤胤の春台観はよく見えないのである。

また、篤胤は太宰春台の著書『和読要領』の中から学問方法が記された部分を次のように引用している。

抄はぬきがきなり。抄書とは書を見るとき有用の語を抄するなり。

すべて書を読む者かならず數十張の紙を小冊子となして。奇字要語を抄すべし。これに五つの益あり一つには故事古語を記憶す。二つには他日の検閲に便なり。三つには字を識る。四つには書學す、む。

五つには抄するによりて。其の本書を見る事かならずくはし。(新平全第十五卷四四九頁)

これは春台が「抄書」の有用性を説いている箇所である。篤胤自身も抜書をしていたと『講本気吹毬』の中で述べているように、江戸遊学時代に太宰春台のこの著書を読んでいた可能性もあるだろう。なお、『呵妄書』では『和読要領』について否定的にしか述べていないが、この「太宰純の嘉言」では肯定的に扱っていることに注目しておきたい。

次に、篤胤は『文會雜記』の記述を利用しながら春台の学問方法や人格を称賛している。すなわち、①「書籍を校合する事いとく精密く。」「②「文章を作くも平易にして。よく通ゆる事を主としたるなど。」「③「弟子の教へかたも嚴重なりけるゆゑ。弟子ども大かたは人がらよく。」「④「高き人とて諂ふ事なきは。いと猛き所為なり。」「⑤「小学の嘉言善行に入るべき人」(新平全第十五卷四五〇頁)と述べている。①③は学問教育の方法、④⑤は人格に関するものである。この五例を挙げて、春台には「褒べき事」「學者の學びてよき事」が多々あるというのである。

このように、篤胤は「太宰純の嘉言」の中で太宰春台の人格や学問方法を称賛しているのだ。しかし、「太宰純の嘉言」の末尾には「然れども孔子の意を得ず。國忠の志なかりしは。惜き事なり。」とある。やはり、孔子の『春秋』の意に反していると批判しているのだ。「太宰純の嘉言」は春台を称賛することが目的なのではないことが分かるであろう。

## (2) 古文孝経の序文

太宰春台は『古文孝経』を校訂してそれに序文を付している。篤胤は『気吹舎筆叢』所収の「孝経」「古文孝経の序」において、春台の序文の

書き方を問題にして次のように批判する。

①「彼の中華聖人の尊き國に絶たる貴書『古文孝経―筆者註』の。我が夷狄の賤き國に存りあるは。いとも異き事なりと云へるにて。斯く云は。此の男「太宰春台―筆者註」の癖なれども。餘りに西戎國へ詔ひたる書ざまにて見るに胸わろく。堪しがたくなむ。」(新平全第十五卷四四五頁)

②「日本享保と書るなど。殊に拙く。誰に憚りて日本と冠せたるや。此は西戎國を主とし我國をよそにするものにて。例の狂れ事なり。

本文の初に。日本信陽と書るは。此は西戎國の書へ。皇國人の手を入れたるなれば。日本と置きてもまづはよきを。信陽とはいかにぞや。かやうの國名皇國には何處にかはある。太宰は信濃國の人なれば。其を漢國に信陽といふ所ある故。それに混らして。漢めかさむとの心か。」(新平全第十五卷四四五頁)

まず、①では春台の極端な中国崇拜を問題にしている。殊に、中国を「中華聖人の尊き國」、日本を「我が夷狄の賤き國」と記していることを批判するのである。②は太宰春台が信濃國を「日本信陽」と表記したことを問題にしている。このように春台の書いた「古文孝経序文」の中に中国崇拜が端的に出ているとして、激しくこれを批判するのであった。

### おわりに

本稿は、篤胤による太宰春台批判について『呵妄書』『古道大意』『西籍慨論』『講本気吹魅』『入学問答』『気吹舎筆叢』の順に検討してきた。ここでまとめておきたい。

篤胤は鈴屋入門以前から孔子に深く傾倒していたのであった。殊に、『春秋』の中に孔子の意志が最もよくあらわれていると考えて、『春秋』の中の尊卑外の趣旨を非常に重視する。そして、太宰春台の中国崇拜

の傾向に対して、『春秋』の意に反していると繰り返し批判しているのである。この点が篤胤の太宰春台批判の大きな特徴であるのだ。篤胤国学におけるナシヨナリズムの傾向は、太宰春台の極端な中国崇拜を批判する過程で強化されていったものと考えられるのである。

なお、本稿では篤胤の荻生徂徠批判については簡単にしか述べていない。『新鬼神論』『気吹舎筆叢』などで篤胤はしばしば徂徠について言及しているが、これについては今後の課題としたい。

### 〔註〕

- (1) 村岡典嗣『宣長と篤胤―日本思想史研究Ⅲ―』(創文社、昭和三二―一九五七)年の三一―四〇頁を参照。
- (2) 田原嗣郎『平田篤胤』(吉川弘文館、昭和三八―一九六三)年の一〇五―一〇八頁を参照。
- (3) 三木正太郎『平田篤胤の研究』(臨川書店、昭和四四―一九六九)年の五〇―五五頁を参照。
- (4) 子安宣邦『宣長と篤胤の世界』(中央公論社、昭和五二―一九七七)年の一三四頁を参照。
- (5) 小笠原春夫『呵妄書について』(『国学院雑誌』七四―一一、昭和四八―一九七三)年。後に同『国儒論争の研究』(ベリかん社、昭和六三―一九八八)年に所収。
- (6) 拙稿『平田篤胤の古学派批判とその意図』(『神道史研究』第四四卷第4号、平成八―一九九六)年一〇月)では、篤胤による仁斎学派批判・徂徠学派批判の素描を行った。
- (7) 芳賀登編『新修平田篤胤全集』(全二巻、名著出版、昭和五一―一九七六)年(昭和五六―一九八一)年の第八巻所収の『三五本図考』七〇四頁。以下、本稿では『新修平田篤胤全集』を新平全と略記する。なお、全集からの引用にあたっては、俗字などの表記を改めた。
- (8) 中山菁莪については、關儀一郎・關義直共編『近世漢学者傳記著作大

事典(琳書店・井上書店、昭和五六(一九八一)年)の三七〇頁、渡部綱次郎『近世秋田の學問と文化―儒學編―』(平成一〇(一九九八)年)を参照。

(9) 渡辺金造『平田篤胤研究』(鳳出版、昭和五三(一九七八)年)の三頁。なお、渡辺は「ハナワ入門」について、温故堂塙次郎のことと解釈しているが、誤りである。温故堂塙次郎(忠室)の生没は一八〇七〜六二であるから、寛政七(一七九五)年にはまだ生まれていない。「ハナワ」は塙保己一と解すべきだろう。

(10) 平田鏡胤『大壑君御一代畧記』(新平全第六卷)五九七頁。

(11) 平田篤胤『靈能真柱』(新平全第七卷)一八二頁。

(12) 伊藤仁斎著・清水茂校注『童子問』(高木市之助・西尾實・久松潜一・麻生磯次・時枝誠記監修『日本古典文学大系九七 近世思想家文集』所収、岩波書店、昭和四一(一九六六)年)の五八頁、一五三〜一五四頁、一六〇頁を参照。

(13) 本居宣長『くず花』(大野晋・大久保正編集校訂『本居宣長全集』第八卷所収、筑摩書房、昭和四七(一九七二)年)の一三二頁には「そも／＼聖人を尊みながら、此段は、かの孔丘が尊内卑外の意に大きにそむけり」とある。ここで宣長は孔子を利用して儒者に反論している。しかし、宣長はこうした論法をあまり用いないということに注意しておきたい。

(14) 平田篤胤著・田原嗣郎校注『新鬼神論』(家永三郎他七名編集『日本思想大系五〇 平田篤胤・伴信友・大國隆正』所収、岩波書店、昭和四八(一九七三)年)の一五三頁に「太宰純が経済録の祭祀と云ふ条に云へるは、『時々祭をなして、雨をもとめ風を止め、国のため民の為に福を祈り、災をはらふ事、常の人より見れば、かへりて愚なるやうに見ゆれども、人力を尽したる上は、神祇の助を憑むよりほかはなきものなり。神は聡明正直なるものにて、兒童の戯の如くなる祭をなして感応ある、これ鬼神の測りがたきところなり。天を畏れ、民を愛ふるは、王者のこゝろなり。此段は尋常の經学者の徒の預り知る所にあらず」と云へるは実に然ることにて、いとくめでたく、眞の道に称ひたる説

なりけり。」と記している。篤胤は太宰春台の言葉のうち「神は聡明正直なるものにて、兒童の戯の如くなる祭をなして感応ある、これ鬼神の測りがたきところなり。」の部分に感心しているであろう。

(15) 『孟子』の訓読は、内野熊一郎『新釈漢文大系第4巻 孟子』(明治書院、昭和三七(一九六二)年)の二二六頁を参照した。

(16) 『出定笑語』では太宰春台について「既ニ漢學者デモ、太宰彌右衛門、號ヲ春臺ト申タル腐儒者ナドハ、辨道書トイフ書ヲ著シテ、ソレニ申スコトハ、本朝ニ於テ厩戸ノ功ハ、制作ノ聖トモ云ベキ人ニテ候、聖德太子ト諡セラレタルモ、虚名ニアラズ候、ナド、云マシタガ、是ハ、聖德太子ハ、佛法バカリデナク、漢風ノ事ヲモ御始メナサレタル故、儒者ノクサレ心ニ、ソレヲ憍ク思ツテノコトジャガ、其カラ風ヲ御用ヒナサレタル故、漢風ニ天皇ヲ弑シ奉ツタモノデゴザル。コノ太宰ナドハ、今時ノ漢學者流ガ、鬼神ノ如ク恐レル儒者チャガ、扱々儒者ナド、申モノハ、眞ノ道ハ不案内ナモノデゴザル。」(新平全第十卷三八八頁)と述べている。この中で「春台ナドハ、今時ノ漢學者流ガ、鬼神ノ如ク恐レル儒者チャガ」とあるが、太宰春台を称賛することが本意ではなく、批判するために言及していることに注意しておきたい。

(17) 本居宣長『玉勝間』(大野晋・大久保正編集校訂『本居宣長全集』第一卷所収、筑摩書房、昭和四三(一九六八)年)の四〇頁の「儒者の皇國の事をばしらずとてある事」を参照。

(18) 近藤啓吾編『浅見綱齋集』(国書刊行会、昭和六四(一九八九)年)の三五六〜三五七頁、三六八〜三七三頁を参照。

(19) 原念齋著・源了円訳注・前田勉訳注『先哲叢談』(東洋文庫574、平凡社、平成六(一九九四)年)の山崎闇斎の条の一一八〜一一九頁を参照。

(20) 平田篤胤『呵妄書』(新平全第十卷)一七九〜一八〇頁。